

旧館林市庁舎の保存・継承・活用における 文化庁国立近現代資料館収蔵資料の活用の可能性について

[活動報告]

橋本 純*

The possibility of utilizing the materials stored at the National Archives of Modern Architecture, Agency for Cultural Affairs, in the preservation, succession, and utilization of the old Tatebayashi City Hall

HASHIMOTO Jun

This is a report on activities regarding the preservation and utilization of outstanding modern architecture by storing and utilizing design documents left behind by the architects who designed the buildings, and the possibility of revitalizing regional areas.

キーワード：近現代建築の保存・継承・活用、建築資料の分散配置、地方創生
preservation, inheritance, and utilization of modern architecture,
multi-location of architectural materials, vitalizing local economy

1. 本稿の目的

文化庁国立近現代建築資料館 National Archives of Modern Architecture, Agency for Cultural Affairs [NAMA] (以下 NAMA) は、2013年5月の開館以来、事業の枠組みとして「情報収集、建築資料の収集・保管、教育普及、調査研究等」の4本の柱を掲げて運営されてきた。しかし開館から10年を経て、これらの事業を実践していくための環境は確実に変化をしつつある。たとえば、情報関連技術の進展は、収蔵資料のデジタル化とその幅広い公開を強く求めてくるようになり、建築家の遺した設計資料は当初想定よりはるかに多く、収蔵庫の増床は、常に喫緊の課題としてあり続けている。加えて、収蔵資料のより積極的な活用方法も求められるようになってきた。

そうしたなか、かねてから市民団体・行政が連携して保存・継承・活用が進められてきた「旧館林市庁舎」—— NAMA に設計資料が収蔵されている建築物——において、NAMA の収蔵資料の収蔵・活用の可能性についての検討が始まった。本稿は、今後の資料収集・保存・活用のあり方と、建築資料を活用した地方創生の可能性を見据えた試みの活動報告である。

2. 「旧館林市庁舎」について

「旧館林市庁舎」(以下、旧市庁舎) [写真1]は、建築家・菊竹清訓(1928–2011)の設計により、1963年に館林市仲町に竣工した。設計者である菊竹は、戦後日本を代表



写真1 2023-05-29 旧館林市庁舎全景 (撮影：著者)

する建築家であり、自らが主体的に関わったメタボリズムグループの活動は、世界的に評価の高い建築運動として位置づけられている。メタボリズムは、一般的には「新陳代謝」と訳されるが、ともにメタボリズムを主導した建築評論家の川添登(1926–2015)は、「菊竹の発見は建築空間は不変の構造をもっている、ということであ

*文化庁国立近現代建築資料館 主任建築資料調査官、修士(工学)

た」¹と述べている。そして「建築には『機能が相当違うにもかかわらずそっくりそのまま使えるような部分』『何べんこわしても、しかしおなじような形でしか考えられない部分』があり、それを氏(菊竹—著者注)は『主要な空間』、これに対して、その時々機能に応じて付け加えられ、あるいは捨てられる部分を『従属的な空間』とし、その二つの空間の関係が建築の普遍的な構造であると考えたのである。」²と、菊竹のメタボリズムの思想を、菊竹との共著のなかで、菊竹の言葉を引用しながら解説しているので、これが両者が共有するメタボリズムの定義であるといっていよう。

菊竹は、1953年に自らが主宰する建築設計事務所を開業し、1958年に自邸「スカイハウス」を竣工させ、新進気鋭の建築家として注目を集めた。メタボリズムグループの活動は1960年に東京で開催された「世界デザイン会議」に合わせて立ち上がったので、1961年に設計が始まる旧市庁舎は、メタボリズムの思想を反映した菊竹の初期の重要な作品であるといえる。

また、構造設計を担当した松井源吾³は、自らの手記⁴において、旧市庁舎は、松井が開発し今も建築界で広く使われている「ヴォイド・スラブ」(中空スラブ)の技術を用いた実施第1号の建物であると記している。加えてそのスラブを支える4隅の大きな「壁柱」について松井は、その応力分布を光弾性実験で検証し構造的合理性を証明してみせた。

つまり、旧市庁舎は、当時の日本の最先端の建築思想と構造設計技術によって実現した建築物なのである。

3. 旧市庁舎の現状と保存・継承・活用に向けた活動について

1961年に、当時の遠藤仁之輔市長が新市庁舎の建設を市議会に諮り、菊竹清訓建築設計事務所との契約が承認され、設計が始まる。

NAMAに収蔵された旧市庁舎の図面を時系列で見ると、当初は低層のコの字形平面で検討していたが、1961年12月ごろ、現行案が構想され始め、1963年に竣工、供用が開始されている。たった2年間で最先端の設計がなされ、竣工に至っている点に驚かされる。

しかし、市庁舎としての役目は意外に短命で、1981年には現市庁舎へ機能移転された。当時から、公共的なものだから残してほしい、地区公民館、教育センターとして残せないか、といった声が上がっていて、それを受けた市は、1982年以降「館林市民センター」として活用し、現在に至っている。

建物用途は変わっても、菊竹清訓の建築としての評

価が変わることはなく、見学希望者は絶えることがなかった半面、築60年を過ぎた建物ゆえ、建て替えて新しい市民センターをつくってはどうかという声も出始めていたと聞く。

建築物の価値を前面に押し出した保存・継承・活用への転機は、市民有志が旧市庁舎は残していくべき建物だという声を上げたことに始まる。その中心となった人物が館林市内で物販店舗を営む丸山達也さんである。丸山さんの、行政をはじめ各方面への働きかけがあり、2021年、コロナ禍で各種イベントが縮小するなかで館林市は、「つなぐ・まちなかフェス in たてばやし」を企画、官と民が協力しお互いの強みを高め合う取り組みと位置づけ「民間団体が事業を実施し、市が開催のための支援をすること」の実践として、2021年11月23日の一日限定ではあったが、旧市庁舎を使って行うイベント開催について丸山さんに打診をした。

丸山さんは友人たちと3人で、任意団体 TBRI(東毛建築リサーチ研究所)を立ち上げ、「メタボリズムと旧館林市庁舎」と銘打った展覧会を企画、旧市庁舎に関する資料を市役所から借り受け、旧市庁舎内に現存していた家具や備品などを集めた展示を行い、さらに市内の2か所にて「ART & DESIGN TATEBAYASHI ~椅子展」を同時に企画、メディアによる情報発信支援も得て、たった一日のイベントにもかかわらず市内外から700人の来訪者を集めた。

翌2022年、前年度の予想以上の反響に市は、TBRIに2022年度のイベントの打診をするとともに、旧市庁舎の1階に賃借していた農業共済が年度内退去となることが確定したことを受けてトライアルサウンディング事業者の公募をかけ、TBRIがそれに応募、受託したことで、TBRIはより主体的に旧市庁舎の継承・活用を担うこととなった。

2022年、TBRIは「メタボリズム建築と旧館林市庁舎のかたち」展を開催、前年度を上回る延べ900人ほどの来訪者を集めた。そのなかには菊竹清訓建築設計事務所の元所員の方々や DOCOMOMO⁵の関係者なども多く含まれており、彼らにも助言を仰ぎ、旧市庁舎のより積極的な活用に向けての検討は加速し始めた。

4. 収蔵資料の分散配置と

それを活用した地方創生に向けての展望

旧市庁舎は、2階と3階の間に四隅の壁柱を緊結する大梁が架けられており、その梁成を活用して中3階を設け、行政書類を保管する収蔵庫として使っていた。庁舎機能が移転してからは、一部書類置場や市民センター

の物置になっていたが、安定した温熱環境が保持されていることから、そこを NAMA の収蔵資料の収蔵場所として使わせてもらうことができないかという構想が浮上したのである。

その背景には、NAMA のひっ迫する収蔵庫不足問題がある。NAMA は、2013 年の開館以来、多くの著名な建築家の資料を段階的に収蔵してきており、開館 10 周年に当たる 2023 年時点で、すでに収蔵資料数 20 万点を超えている。NAMA に移動し、整理作業中の借用資料などを含めればその数はさらに膨大なものとなる。これは開館当初の想定を大きく上回るボリュームであった。国立のアーカイブ施設ゆえ資料が増えることはあっても減ることはないため、将来の収蔵庫不足は当初より懸念されていたが、それを理由に収蔵を止めては NAMA の存在意義自体が問われることになるため、収蔵庫の確保は尽力して解決していかななくてはならない課題であり、それゆえ浮上してきた構想なのである。

一方、それに際しては、資料が収蔵されることで館林市にもなんらかの果実が生まれるようであればならない。協働していくのならば Win-win の関係を築いていく必要がある。資料の収蔵は長きにわたって継続されるものであり、その時間に耐えられる自走システムを構築しなければ、Win-win の関係は成立しない。現時点で考えられる現実的な自走システムとしては、旧市庁舎を集客力のある地方創生の核として再生し、まちのにぎわいを生み出し、地域経済の活性化につなげ、旧市庁舎への投資価値を高めていくことであると考えた。日本の近現代建築は世界的にも関心が高く、とりわけ、菊竹の建築は注目度が高いが、現在、5 年間の期限付きでトライアルサウンディング事業者に委託されている状況を鑑みれば、そうした潜在価値の高い建物であっても解体の憂き目にあうことは想定外のことではまったくない。事実、価値があるものであるにもかかわらず、解体されてしまった近現代建築は数多くあり、その危機的状況は今も続いている。したがって近現代建築を文化資源として活用できる道筋を組み立て、保存に貢献することは、NAMA の現業業務を越境しているように思われるかもしれないが、建築物自体が第一の建築資料であることに加え、こうした活動が収蔵庫の拡張や収蔵資料の活用に向けての新しい道筋の構築であると位置づければ、NAMA の活動の一環なのである。

今年度、TBRI と館林市は、11 月 23 日～26 日の 4 日間を旧市庁舎を全面的に使ったイベントの開催期間に定め、初日には旧市庁舎が DOCOMOMO の選定を受

けた記念の授賞式を、24 日は一般開放日とし、週末に当たる 25、26 日のイベント企画については筆者にもアイデアが求められた。

こうした課題解決は、広く知恵を結集できるチームを組んで臨むべきと考え、館林市区画整理課、TBRI、菊竹清訓建築設計事務所の元所員である塚本二郎さん、「菊竹清訓建築設計資料」に詳しい東京理科大学の斎藤慎吾さんとともに協議を重ね、まずは市民の方々に旧市庁舎が国内外から広く関心を持たれている名建築であることを広く知ってもらうことに力を注ぐこととした。市庁舎機能が移転して 40 年近くなるのだから、市民認知が薄れていることはしかたがないことで、市民に再認識してもらうことから始めることが望ましいと考えたのである。

そこでふたつのイベントを企画することとした。ひとつは子どもも参加できるように市民向けイベント、もうひとつは市外からの集客が期待できるイベントである。

25 日に予定された市民向けのイベントの趣旨は、前述のとおり市民への再認知の促進にある。そのためにはどのような手段で再認知を促すかを話し合った結果、旧市庁舎を被写体とした撮影会を開催することにした。被写体として目を向けてもらうことで認知を促進しようという目論見である。ただし一般の方々は建築写真など撮らないから、難しそうだと思われ、敬遠されてしまうかもしれない。そこで写真家を講師として招き、導いてもらうことにしたが、議論の末、建築写真の専門家ではない方をお願いすることになった。市民に撮ってもらうのだから、建築写真の流儀のようなものは外したほうがよからうという判断である。今回お願いしたのは鈴木陽介さんという写真家で、筆者の知人を介しての紹介である。彼のアトリエを訪ねて打ち合わせをするなかで、筆者では想像もできなかったアイデアの提案があった。それは、旧市庁舎の模型をつくり、撮影会参加者が撮った写真をその場でプリントして貼り付けて、もうひとつの旧市庁舎をつくらう、というものである。館林市の職員の方々が高さ約 1.5m ほどの段ボール製の旧市庁舎の模型を作成、参加者にはスマートフォンあるいはデジタルカメラを持参してもらい、撮った写真を館林市が用意したプリンタを用いて出力し、その模型の好きな場所にそれを貼っていき、ひとつのアート作品をつくるというワークショップを行った。[写真 2]

それぞれが思い思いの場所を撮り、それをプリントして貼り付けるという一連の行為は、ただ写真を撮るだけのワークショップとは違う参加者の記憶への刻ま



写真2 2023-11-25 WSの集合写真（撮影：著者）

れ方をしたことであろう。

イベント参加者は途中参加も含めて40名近く、親子での参加が多かった。多田善洋館林市長にもご参加いただけたことは市民への周知という点でも意義深いものだった。出来上がった模型は今も旧市庁舎に展示されている（2024年3月末時点）。写真家の鈴木さんからは、参加者から提供いただいた写真の総体を「NFTアート」としてマーケットプレイスで公開し参加者と共有するとともに、買い手がつけばその収益を建物の改修費用の補助に充てるといったことも考えてはどうかという提案があった。それは実現しなかったが、十分にワークショップの目的は達せられたといえるであろう。

最終日の26日は、市外県外からの集客を見込んだイベント企画として、建築家の長谷川逸子さんをお招きしての講演会を企画した。長谷川さんは1941年生まれ、1964年から1968年の間、菊竹清訓建築設計事務所に勤務し、独立後は数多くの建築作品を発表し、国内外で評価の高い建築家である。筆者が司会を務め、長谷川さんからは、菊竹さんとの思い出や事務所時代のエピソード、メタボリズムという思想の今日的可能性や、旧市庁舎がリノベーション＝新陳代謝＝メタボリズムされて継承されていく意義、さらには市民に愛される建築であり続けるために求められることなど、幅広い角度から知見をうかがうことができた。[写真3]

著名建築家の講演会が旧市庁舎の5階旧議場で開催されるということで、当日は満席の集客を達成した。それは長谷川逸子さんというネームバリューだけでなく、旧市庁舎が、それだけの人を集めるだけの魅力的な建築であり、築年数に関係なく現在においても価値のある市の財産であるということの証である。市民への文化財としての認知も進んだことであろう。



写真3 長谷川逸子さんの講演（撮影：塚本二朗）

5. まとめ

NAMAに収蔵される資料は、かつてそれらを用いて建築物がつくられたという歴史を持っている。その建物は多くの人々に利用され、その人たちの記憶に刻まれた貴重な文化的遺産であるのだから、壊されることなくできるだけ長く継承・活用されて欲しい。

本報告は、近現代建築の価値とその設計資料の価値を接続し、地方創生の活力へと転換していくための可能性を探る試みの初年度の活動記録である。

注

- 1 菊竹清訓・川添登 編著「菊竹清訓 作品と方法 1956-1970」美術出版社、1973年
- 2 同上
- 3 松井源吾（1920-1998） 構造家、早稲田大学名誉教授
- 4 松井源吾 編 第1号 松井源吾還暦記念、1980年12月、私家版
- 5 DOCOMOMO モダン・ムーブメントにかかわる建物と環境形式の記録調査および保存のための国際組織。

（2024年12月11日原稿受理）